

表 10-2 外出手段（項目別）

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
外出していない	1名 0.7%	3名 2.8%	4名 1.6%	5名 2.8%	12名 7.5%	17名 5.0%	21名 3.6%
車を運転	88 61.1%	23 21.7%	111 44.4%	82 45.3%	6 3.8%	88 25.9%	199 33.7%
家族の車	33 22.9%	50 47.2%	83 33.2%	38 21.0%	70 44.0%	108 31.8%	191 32.4%
歩いていく	37 25.7%	26 24.5%	63 25.2%	55 30.4%	56 35.2%	111 32.6%	174 29.5%
タクシー	10 6.9%	23 21.7%	33 13.2%	39 21.5%	44 27.7%	83 24.4%	116 19.7%
公共交通機関（バス・電車）	6 4.2%	14 13.2%	20 8.0%	11 6.1%	35 22.0%	46 13.5%	66 11.2%
自転車	20 13.9%	14 13.2%	34 13.6%	23 12.7%	5 3.1%	28 8.2%	62 10.5%
バイク	10 6.9%	1 0.9%	11 4.4%	21 11.6%	6 3.8%	27 7.9%	38 6.4%
電動三輪車	1 0.7%	2 1.9%	3 1.2%	3 1.7%	9 5.7%	12 3.5%	15 2.5%
車いす	0 0.0%	1 0.9%	1 0.4%	2 1.1%	4 2.5%	6 1.8%	7 1.2%
その他	1 0.7%	0 0.0%	1 0.4%	3 1.7%	5 3.1%	8 2.4%	9 1.5%
計	207 143.8%	157 148.1%	364 145.6%	282 155.8%	252 158.5%	534 157.1%	898 152.2%

Ⅲ. 「参加」の状況

「参加」(participation)とは、「生活・人生への関与」であり、関与とはある状況にかかわり、その中でなんらかの役割を果たすことである。これはICFによって導入された新しい概念であるために正しく理解されにくい点があり、「社会参加」といいかえて使われることも少なくない。しかしそれは誤解であり、「参加」は社会参加を含むがそれにとどまるものではない。ICFの分類に則していえば、家庭生活、対人関係の中での役割の遂行、教育、雇用・就労、経済生活、社会生活、市民生活（宗教・政治・文化生活を含む）への関与などの広い範囲にわたるものである。

1. 家庭内の役割

1) 家庭内の自分の役割

「家庭の中のことで自分の役割になってい

ること」は表 11-1 に示すように「特になし」は前期 29.2%に対し後期では 32.9%であった。表 11-1 で示すように回答者別で最も多かったのは前期・後期とも「家事(全て)」で、前期 17.6%、後期 20.0%であった。ただ、全体として男女差が大きく、この「家事」についても前期で男性 7.6%、女性 31.1%、後期で 8.8%、32.7%と圧倒的に女性に多かった。ただこれは「家事」のみが家庭内役割である人である。

この点「手帳非所持」群では「特になし」は 25.2%、25.0%であり、当群よりはやや少なく、また「家事」のみをしている人は女性に限ってみて前期 44.9%、後期 32.2%とかなり多かった。

複数回答が多いため、項目別の回答（合計は 100%以上）をみると、表 11-2 に示すよ

うに前期では「家事（全て）」が最も多く 26.4%（男性9.7%、女性49.1%）、次に「家庭菜園」19.2%（男性22.2%、女性15.1%）、「庭いじり」は18.4%（男性19.4%、女性17.0%）、「家事（自分が主だが時に手伝いあり）」は14.0%（男性9.0%、女性20.8%）、「家事（一部）」は11.6%（男性13.9%、女性8.5%）、「留守番」は6.4%（男性6.9%、女性5.7%）であった。

後期では「家事（すべて）」が最も多く 28.8%（男性11.6%、女性48.4%）、「庭いじり」は18.8%（男性19.9%、女性17.6%）、次に「家庭菜園」18.5%（男性18.2%、女性18.9%）、「家事（一部）」は9.7%（男性7.7%、女性11.9%）、「家事（自分が主だが時に手伝いあり）」は7.6%（男性6.1%、女性9.4%）、「留守番」は9.1%（男性8.3%、女性10.1%）

であった。

「家事（自分が主だが時に手伝いあり）」が前期で14.0%に対し後期7.6%と少なかった。

男女差についてみると「家事（全て）」は前期で男性9.7%に対し女性49.1%、後期で男性11.6%対女性48.4%、「家事（自分が主だが時に手伝いあり）」は前期で男性9.0%対女性20.8%と女性が多かった。一方「家事（一部）」は前期で男性13.9%に対し女性8.5%、「家庭菜園」は前期で男性19.4%対女性17.0%と男性が多かった。

「手帳非所持」群と比較すると、「家事（全て）」は前期で男性11.2%、女性63.1%、後期で11.6%、50.1%と前期ではこの「手帳所持」群より高かったが、後期ではほとんど同じであった。

表 11-1 家庭内の自分の役割（回答者別）

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
特になし	54名 37.5%	19名 17.9%	73名 29.2%	79名 43.6%	33名 20.8%	112名 32.9%	185名 31.4%
家事(全て)	11 7.6%	33 31.1%	44 17.6%	16 8.8%	52 32.7%	68 20.0%	112 19.0%
家事(自分が主だが時に手伝いあり)	9 6.3%	13 12.3%	22 8.8%	5 2.8%	10 6.3%	15 4.4%	37 6.3%
家事(一部)	12 8.3%	7 6.6%	19 7.6%	11 6.1%	11 6.9%	22 6.5%	41 6.9%
庭いじり	8 5.6%	0 0.0%	8 3.2%	12 6.6%	4 2.5%	16 4.7%	24 4.1%
家庭菜園	10 6.9%	2 1.9%	12 4.8%	15 8.3%	3 1.9%	18 5.3%	30 5.1%
留守番	7 4.9%	1 0.9%	8 3.2%	8 4.4%	4 2.5%	12 3.5%	20 3.4%
家族の介護	1 0.7%	0 0.0%	1 0.4%	1 0.6%	1 0.6%	2 0.6%	3 0.5%
その他	3 2.1%	0 0.0%	3 1.2%	1 0.6%	0 0.0%	1 0.3%	4 0.7%
複数回答	27 18.8%	31 29.2%	58 23.2%	30 16.6%	41 25.8%	71 20.9%	129 21.9%
返答なし	2 1.4%	0 0.0%	2 0.8%	3 1.7%	0 0.0%	3 0.9%	5 0.8%
計	144 100%	106 100%	250 100%	181 100%	159 100%	340 100%	590 100%

表 11-2 家庭内の自分の役割（項目別）

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
特になし	54名 37.5%	19名 17.9%	73名 29.2%	79名 43.6%	33名 20.8%	112名 32.9%	185名 31.4%
家事(全て)	14 9.7%	52 49.1%	66 26.4%	21 11.6%	77 48.4%	98 28.8%	164 27.8%
家庭菜園	32 22.2%	16 15.1%	48 19.2%	33 18.2%	30 18.9%	63 18.5%	111 18.8%
庭いじり	28 19.4%	18 17.0%	46 18.4%	36 19.9%	28 17.6%	64 18.8%	110 18.6%
家事(一部)	20 13.9%	9 8.5%	29 11.6%	14 7.7%	19 11.9%	33 9.7%	62 10.5%
家事(自分が主だが時に手伝いあり)	13 9.0%	22 20.8%	35 14.0%	11 6.1%	15 9.4%	26 7.6%	61 10.3%
留守番	10 6.9%	6 5.7%	16 6.4%	15 8.3%	16 10.1%	31 9.1%	47 8.0%
家族の介護	4 2.8%	0 0.0%	4 1.6%	1 0.6%	4 2.5%	5 1.5%	9 1.5%
その他	5 3.5%	1 0.9%	6 2.4%	3 1.7%	2 1.3%	5 1.5%	11 1.9%
計	180 125.0%	143 134.9%	323 129.2%	213 117.7%	224 140.9%	437 128.5%	760 128.8%

2) 家庭内役割等の家の中のことで、この一年間でしなくなったこと

「家の中のことで、この一年間で、しなくなったこと」は表 12 に示すように「なし」は前期 76.0% に対し後期では 72.4%、「あり」は前期 13.2%、後期 11.2% であった。すなわち僅か 1 年間のうちに 1 割以上の人が家の中のことをしなくなったことがあることになる。

3) 家の中のことでしなくなった理由

「家の中のことでしなくなった理由」は表

13 に示すように「同居して他の家族がしてくれるようになった」は前期 4.8% に対し後期では 4.4%、「疲れやすい」は前期 8.4%、後期 10.3%、「家事の動作が難しくなった」は前期 5.2%、後期 5.9% であった。

このように「疲れやすい」「家事の動作が難しくなった」等の「活動」の制限と、「同居して他の家族がしてくれるようになった」のような「環境因子」の変化に伴う「参加」面の制約が「家の中のこと」をしなくなったことの主な原因であった。

表 12 家の中のことでこの一年間でしなくなったこと

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
なし	112名 77.8%	78名 73.6%	190名 76.0%	138名 76.2%	108名 67.9%	246名 72.4%	436名 73.9%
あり	14 9.7%	19 17.9%	33 13.2%	14 7.7%	24 15.1%	38 11.2%	71 12.0%
返答なし	18 12.5%	9 8.5%	27 10.8%	29 16.0%	27 17.0%	56 16.5%	83 14.1%
計	144 100%	106 100%	250 100%	181 100%	159 100%	340 100%	590 100%

表 13 家の中のことでしなくなった理由

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
同居して他の家族がしてくれるようになった	7名 4.9%	5名 4.7%	12名 4.8%	10名 5.5%	5名 3.1%	15名 4.4%	27名 4.6%
疲れやすい	13 9.0%	8 7.5%	21 8.4%	18 9.9%	17 10.7%	35 10.3%	56 9.5%
家事の動作が難しくなった	3 2.1%	10 9.4%	13 5.2%	8 4.4%	12 7.5%	20 5.9%	33 5.6%
その他	3 2.1%	5 4.7%	8 3.2%	8 4.4%	3 1.9%	11 3.2%	19 3.2%
複数回答	2 1.4%	2 1.9%	4 1.6%	5 2.8%	5 3.1%	10 2.9%	14 2.4%
返答なし	116 80.6%	76 71.7%	192 76.8%	132 72.9%	117 73.6%	249 73.2%	441 74.7%
計	144 100%	106 100%	250 100%	181 100%	159 100%	340 100%	590 100%

2. 仕事

仕事の状況は表 14 に示すように「仕事をしたが、していない」は前期 32.8%に対し後期では 27.6%、「特に仕事をしたいとは思わない」は 19.6%、31.5%であった。両者をあわせて仕事をしていない人は前期 52.4%から後期 59.1%へと増えた。

この点「手帳非所持」群では仕事をしていない人は 35.7%、53.2%であり、当群よりは少なかった。

「農業」は 29.6%、23.5%、「自営業」は 9.6%、5.3%、「常勤の一般の仕事」は 1.2%、0.6%、「パート勤務」は 1.2%、0%、「ボラ

ンティア的な仕事」は 2.4%、2.1%であった。

ちなみに「手帳非所持」群では「農業」は 38.0%、29.2%、「自営業」は 11.2%、6.5%、「ボランティア」4.4%、2.6%、「パート勤務」4.0%、0.5%、「常勤の一般の仕事」3.1%、1.5%であり、それに比べると、種類はほとんど同じであるが、程度はこの「手帳所持」群ではやや低かった。

「仕事をしたいがしていない」は前期 32.8%に対し、後期 27.6%、「農業」は前期 28.0%対後期 22.4%と少なかった。一方「特に仕事をしたいとは思わない」は前期 19.6%に対して、後期は 31.5%と多かった。

男女差について見ると、「特に仕事をしたいと思わない」が前期で男性 15.3%に対し女性 25.5%、後期で男性 26.0%対女性 37.7%と多かった。一方、「農業」については、前期の男性 31.3%に対し女性 23.6%、後期で男性 25.4%対女性は 18.9%と少なかった。

表 14-1 仕事の状況（回答者別）

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
仕事をしたいがしていない	47名 32.6%	35名 33.0%	82名 32.8%	49名 27.1%	45名 28.3%	94名 27.6%	176名 29.8%
特に仕事をしたいと思わない	22 15.3%	27 25.5%	49 19.6%	47 26.0%	60 37.7%	107 31.5%	156 26.4%
農業	45 31.3%	25 23.6%	70 28.0%	46 25.4%	30 18.9%	76 22.4%	146 24.7%
自営業	15 10.4%	6 5.7%	21 8.4%	10 5.5%	5 3.1%	15 4.4%	36 6.1%
常勤の一般の仕事	1 0.7%	2 1.9%	3 1.2%	1 0.6%	1 0.6%	2 0.6%	5 0.8%
パート勤務	3 2.1%	0 0.0%	3 1.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 0.5%
ボランティア的な仕事	5 3.5%	1 0.9%	6 2.4%	6 3.3%	0 0.0%	6 1.8%	12 2.0%
その他	0 0.0%	4 3.8%	4 1.6%	6 3.3%	6 3.8%	12 3.5%	16 2.7%
複数回答	3 2.1%	1 0.9%	4 1.6%	4 2.2%	0 0.0%	4 1.2%	8 1.4%
返答なし	3 2.1%	5 4.7%	8 3.2%	12 6.6%	12 7.5%	24 7.1%	32 5.4%
計	144 100%	106 100%	250 100%	181 100%	159 100%	340 100%	590 100%

表 14-2 仕事の状況（項目別）

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
仕事をしたいがしていない	47名 32.6%	35名 33.0%	82名 32.8%	49名 27.1%	45名 28.3%	94名 27.6%	176名 29.8%
特に仕事をしたいと思わない	22 15.3%	27 25.5%	49 19.6%	47 26.0%	60 37.7%	107 31.5%	156 26.4%
農業	48 33.3%	26 24.5%	74 29.6%	50 27.6%	30 18.9%	80 23.5%	154 26.1%
自営業	17 11.8%	7 6.6%	24 9.6%	13 7.2%	5 3.1%	18 5.3%	42 7.1%
常勤の一般の仕事	1 0.7%	2 1.9%	3 1.2%	1 0.6%	1 0.6%	2 0.6%	5 0.8%
パート勤務	3 2.1%	0 0.0%	3 1.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 0.5%
ボランティア的な仕事	5 3.5%	1 0.9%	6 2.4%	7 3.9%	0 0.0%	7 2.1%	13 2.2%
その他	1 0.7%	4 3.8%	5 2.0%	6 3.3%	6 3.8%	12 3.5%	17 2.9%
計	144 100%	102 96.2%	246 98.4%	173 95.6%	147 92.5%	320 94.1%	566 95.9%

3. 趣味・スポーツ

趣味・スポーツの状況について表 15 に示すように「もともと興味がない」は前期 28.8% に対し後期では 30.0%、「したいができない」は 31.2%、32.4%であった。「十分にしている」は 7.2%、7.1%、「ある程度している」は 31.6%、25.3%、両者を合計すると「趣味・スポーツをしている」人は前期 38.8% に対し後期では 32.4% と減少している。

「もともと興味がない」は前期 28.8% に対し後期では 30.0% と多かった。一方「ある程度している」では、前期 31.6% に対し後期 25.3% と少なかった。

この点「手帳非所持」群では「もともと興味がない」は前期 26.4%、後期 35.4%、「十分にしている」は 12.6%、8.3%、「ある程度している」は 42.6%、30.5% であり、それに比べるとこの「所持」群は傾向は似ているが「参加」の程度はやや低かった。

男女差について見ると、「もともと興味がない」は前期で男性 23.6% に対し女性 35.8%、後期で男性 27.6% 対女性 32.7% と多かった。

一方「十分にしている」は後期で男性が 9.4% に対し女性は 4.4%、「ある程度している」が前期で男性 36.8% 対女性 24.5%、後期で男性 28.7% 対女性 21.4% と男性で多かった。

IV. 「心身機能」の状況

1. 体や心の動きで不自由なところ

体や心の動きで不自由と感じている状況は表 16-1 に示すように「特になし」は前期 40.8% に対し後期では 37.9% であった。すなわち、なんらかの不自由のある人は、前期、後期とも約 6 割いることになる。

この点「手帳非所持」群では不自由のある人は前期で約 2 割、後期で 3.5 割であり、大きく異なっている。

複数回答が多いため項目別（合計は 100% 以上）にみると、表 16-2 に示すように前期で「足の動き」が最も多く 37.6%、次に「手の動き」20.0%、「音を聞くこと」8.8%、「ものを見ること」8.8%、「体の一部の切断」7.2%、「声を出して話すこと」3.6% であった。

表 15 趣味・スポーツについて

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
もともと興味がない	34名 23.6%	38名 35.8%	72名 28.8%	50名 27.6%	52名 32.7%	102名 30.0%	174名 29.5%
十分にしている	12 8.3%	6 5.7%	18 7.2%	17 9.4%	7 4.4%	24 7.1%	42 7.1%
ある程度している	53 36.8%	26 24.5%	79 31.6%	52 28.7%	34 21.4%	86 25.3%	165 28.0%
したいができない	43 29.9%	35 33.0%	78 31.2%	55 30.4%	55 34.6%	110 32.4%	188 31.9%
返答なし	2 1.4%	1 0.9%	3 1.2%	7 3.9%	11 6.9%	18 5.3%	21 3.6%
計	144 100%	106 100%	250 100%	181 100%	159 100%	340 100%	590 100%

後期では「足の動き」が最も多く 36.5%、次に「手の動き」18.5%、「音を聞くこと」17.9%、「ものを見ること」16.8%、「認知症」4.7%であった。

このような項目の順番については「手帳非所持」群でも（率はずっと少ないが）ほぼ同様であった。

「ものを見ること」は前期 8.8%に対し、後期は 16.8%、「音を聞くこと」は前期 8.8%に対し後期は 17.9%と多かった。この点「手

帳非所持」群では「ものを見ること」は 3.0%、7.2%、「音を聞くこと」は 2.8%、9.2%であり、この「手帳所持」群ではかなり多かった。

男女差について見ると、「特になし」は前期で男性 43.1%に対し女性 37.7%、後期で男性 42.5%に対し女性が 32.7%と少なかった。一方、「足の動き」は前期で男性 33.3%に対し女性 43.4%、後期で男性 32.6%対女性は 40.9%、「ものを見ること」は後期で男性 13.3%対女性 20.8%と多かった。

表 16-1 体や心の動きで不自由と感じている状況（回答者別）

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
特になし	62名 43.1%	40名 37.7%	102名 40.8%	77名 42.5%	52名 32.7%	129名 37.9%	231名 39.2%
手の動き	4 2.8%	4 3.8%	8 3.2%	4 2.2%	4 2.5%	8 2.4%	16 2.7%
足の動き	22 15.3%	20 18.9%	42 16.8%	17 9.4%	23 14.5%	40 11.8%	82 13.9%
体の一部の切断	2 1.4%	5 4.7%	7 2.8%	6 3.3%	3 1.9%	9 2.6%	16 2.7%
ものを見ること	6 4.2%	3 2.8%	9 3.6%	8 4.4%	14 8.8%	22 6.5%	31 5.3%
音を聞くこと	5 3.5%	4 3.8%	9 3.6%	9 5.0%	7 4.4%	16 4.7%	25 4.2%
声を出して話すこと	1 0.7%	0 0.0%	1 0.4%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.2%
意識障害	1 0.7%	2 1.9%	3 1.2%	1 0.6%	0 0.0%	1 0.3%	4 0.7%
認知症	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.6%	2 1.3%	3 0.9%	3 0.5%
失禁	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
その他	3 2.1%	0 0.0%	3 1.2%	3 1.7%	2 1.3%	5 1.5%	8 1.4%
複数回答	34 23.6%	28 26.4%	62 24.8%	51 28.2%	49 30.8%	100 29.4%	162 27.5%
返答なし	4 2.8%	0 0.0%	4 1.6%	4 2.2%	3 1.9%	7 2.1%	11 1.9%
計	144 100%	106 100%	250 100%	181 100%	159 100%	340 100%	590 100%

表 16-2 体や心の動きで不自由と感じている状況（項目別）

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
特になし	62名 43.1%	40名 37.7%	102名 40.8%	77名 42.5%	52名 32.7%	129名 37.9%	231名 39.2%
足の動き	48 33.3%	46 43.4%	94 37.6%	59 32.6%	65 40.9%	124 36.5%	218 36.9%
手の動き	27 18.8%	23 21.7%	50 20.0%	37 20.4%	26 16.4%	63 18.5%	113 19.2%
音を聞くこと	12 8.3%	10 9.4%	22 8.8%	32 17.7%	29 18.2%	61 17.9%	83 14.1%
ものを見ること	11 7.6%	11 10.4%	22 8.8%	24 13.3%	33 20.8%	57 16.8%	79 13.4%
体の一部の切断	10 6.9%	8 7.5%	18 7.2%	9 5.0%	6 3.8%	15 4.4%	33 5.6%
認知症	2 1.4%	1 0.9%	3 1.2%	5 2.8%	11 6.9%	16 4.7%	19 3.2%
意識障害	3 2.1%	3 2.8%	6 2.4%	5 2.8%	4 2.5%	9 2.6%	15 2.5%
声を出して話すこと	7 4.9%	2 1.9%	9 3.6%	3 1.7%	2 1.3%	5 1.5%	14 2.4%
失禁	0 0.0%	1 0.9%	1 0.4%	4 2.2%	8 5.0%	12 3.5%	13 2.2%
その他	6 4.2%	0 0.0%	6 2.4%	7 3.9%	4 2.5%	11 3.2%	17 2.9%
計	188 130.6%	145 136.8%	333 133.2%	262 144.8%	240 150.9%	502 147.6%	835 141.5%

V. 「健康状態」の状況

「健康状態」（疾患・外傷、等）をみるために通院・入院歴の状況を調べた。

1. 通院の状況

医療施設への通院の状況について表 18 に示すように、通院「あり」は前期 73.6%に対し後期では 80.9%と多かった。

男女差について見ると、「あり」は後期で男性 77.3%であるのに対し女性は 84.9%と多かった。

この点「手帳非所持」群では「あり」は 55.2%、69.5%、後期の男性 64.8%、女性 72.2%であり、傾向はほぼ同じであるが、通

院率はこの「手帳所持」群の方がやや高かった。

このように、7~8割が通院していることは、「水際作戦」（生活機能低下の早期発見・早期対応）としての訪問リハビリテーションにおいて重要である。すなわち生活機能低下の早期発見者として病院・診療所などの医療機関は重要な役割をになうということである。

2. 入院

これまでの入院状況は表 19 に示すように「なし」は前期 28.8%に対し後期 27.1%、「1年以内にあり」は 22.0%、25.6%、「5年以

内にあり」は 28.0%、27.6%、「最近5年間は
ない」は19.6%、17.6%であった。入院の
既往のあるものは計前期・後期とも約7割で
あった。

この点「手帳非所持」群では入院の既往の
ある者は前期で約4割弱、後期で5割弱であ
り、明らかに差があった。

男女差についてみると、「なし」は後期で男
性 23.8%に対し女性 30.8%、「1年以内に
あり」は前期で男性 19.4%対女性 25.5%と多
かった。一方「1年以内にあり」の後期では
男性 29.8%に対し女性 20.8%、「5年以内に
あり」は前期で男性 30.6%対女性 24.5%と少
なかった。

表 18 医療施設への通院の状況

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
なし	37名 25.7%	23名 21.7%	60名 24.0%	37名 20.4%	24名 15.1%	61名 17.9%	121名 20.5%
あり	103 71.5%	81 76.4%	184 73.6%	140 77.3%	135 84.9%	275 80.9%	459 77.8%
返答なし	4 2.8%	2 1.9%	6 2.4%	4 2.2%	0 0.0%	4 1.2%	10 1.7%
計	144 100%	106 100%	250 100%	181 100%	159 100%	340 100%	590 100%

表 19 これまでの入院状況

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
なし	40名 27.8%	32名 30.2%	72名 28.8%	43名 23.8%	49名 30.8%	92名 27.1%	164名 27.8%
1年以内にあり	28 19.4%	27 25.5%	55 22.0%	54 29.8%	33 20.8%	87 25.6%	142 24.1%
5年以内にあり	44 30.6%	26 24.5%	70 28.0%	46 25.4%	48 30.2%	94 27.6%	164 27.8%
最近5年間はなし	30 20.8%	19 17.9%	49 19.6%	34 18.8%	26 16.4%	60 17.6%	109 18.5%
返答なし	2 1.4%	2 1.9%	4 1.6%	4 2.2%	3 1.9%	7 2.1%	11 1.9%
計	144 100%	106 100%	250 100%	181 100%	159 100%	340 100%	590 100%

V. 「環境因子」の状況

1. 補装具等の使用状況

補装具等の使用状況について表 20-1 に示すように回答者別で最も多かったのは「補聴器」で前期 8.8%、後期 18.5%であった。

項目別には表 20-2 に示すように前期では「補聴器」が最も多く 9.6%、次に「装具」4.4%、「ポータブルトイレ」4.4%、「白杖」4.0%、「オムツ」3.2%であった。

後期では「補聴器」が最も多く 25.0%、次に「装具」5.3%、「白杖」5.0%、「しびん」

5.0%、「オムツ」4.7%であった。

「補聴器」が前期 9.6%、後期 25.0%と多かった。

男女差についてみると「白杖」が前期で男性 1.4%に対し女性で 7.5%と多く、一方「しびん」は後期で男性 7.7%に対し女性 1.9%と少なかった。

「手帳非所持」群でも種類別の傾向はほとんど同じであったが、比率は 2 分の 1～3 分の 1 程度であった。

表 20-1 補装具等の状況（回答者別）

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
補聴器	11名 7.6%	11名 10.4%	22名 8.8%	34名 18.8%	29名 18.2%	63名 18.5%	85名 14.4%
白杖	1 0.7%	5 4.7%	6 2.4%	2 1.1%	6 3.8%	8 2.4%	14 2.4%
装具	3 2.1%	4 3.8%	7 2.8%	7 3.9%	5 3.1%	12 3.5%	19 3.2%
義足(切断の場合)	1 0.7%	1 0.9%	2 0.8%	1 0.6%	0 0.0%	1 0.3%	3 0.5%
義手	1 0.7%	0 0.0%	1 0.4%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.2%
電動三輪車	1 0.7%	1 0.9%	2 0.8%	1 0.6%	7 4.4%	8 2.4%	10 1.7%
しびん	1 0.7%	0 0.0%	1 0.4%	6 3.3%	2 1.3%	8 2.4%	9 1.5%
オムツ	1 0.7%	2 1.9%	3 1.2%	3 1.7%	3 1.9%	6 1.8%	9 1.5%
ポータブルトイレ	2 1.4%	3 2.8%	5 2.0%	2 1.1%	4 2.5%	6 1.8%	11 1.9%
電動車いす	1 0.7%	1 0.9%	2 0.8%	1 0.6%	0 0.0%	1 0.3%	3 0.5%
複数回答	7 4.9%	3 2.8%	10 4.0%	20 11.0%	12 7.5%	32 9.4%	42 7.1%
返答なし	114 79.2%	75 70.8%	189 75.6%	104 57.5%	91 57.2%	195 57.4%	384 65.1%
計	144 100%	106 100%	250 100%	181 100%	159 100%	340 100%	590 100%

表 20-2 補装具等の状況（項目別）

	前期			後期			総計
	男	女	計	男	女	計	
補聴器	13名 9.0%	11名 10.4%	24名 9.6%	49名 27.1%	36名 22.6%	85名 25.0%	109名 18.5%
装具	6 4.2%	5 4.7%	11 4.4%	10 5.5%	8 5.0%	18 5.3%	29 4.9%
白杖	2 1.4%	8 7.5%	10 4.0%	8 4.4%	9 5.7%	17 5.0%	27 4.6%
ポータブルトイレ	5 3.5%	6 5.7%	11 4.4%	5 2.8%	9 5.7%	14 4.1%	25 4.2%
オムツ	4 2.8%	4 3.8%	8 3.2%	8 4.4%	8 5.0%	16 4.7%	24 4.1%
しびん	4 2.8%	0 0.0%	4 1.6%	14 7.7%	3 1.9%	17 5.0%	21 3.6%
電動三輪車	1 0.7%	1 0.9%	2 0.8%	3 1.7%	10 6.3%	13 3.8%	15 2.5%
義足(切断の場合)	1 0.7%	1 0.9%	2 0.8%	3 1.7%	0 0.0%	3 0.9%	5 0.8%
電動車いす	2 1.4%	1 0.9%	3 1.2%	2 1.1%	0 0.0%	2 0.6%	5 0.8%
義手	2 1.4%	0 0.0%	2 0.8%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 0.3%
計	40 27.8%	37 34.9%	77 30.8%	102 56.4%	83 52.2%	185 54.4%	262 44.4%

D. 総括的考察

以上、在宅非要介護認定高齢者で身体障害者手帳を所持する者の生活機能の現状をみると、「活動」「参加」「心身機能」に問題をもっている人がかなり多いこと、それが特に後期高齢者に多く、また多くの場合に男女差があり、概して女性のほうに問題が多いことがわかる。また「健康状態」に関連して現在通院していたり、入院歴を持つ人もかなりあり、やはり後期高齢者に多かった。

これを別に報告した在宅非要介護認定者で身体障害者手帳を所持しない者の成績（「在宅非要介護認定・身体障害者手帳非所持高齢者の生活機能」と比較すると、項目によって程度は異なるが、ほぼ全ての項目において「活動」の非自立者、「活動の量」の低下者、「参加」の低下者、また「心身機能」上の問題が、本調査者の対象群（身体障害者手帳所持高齢

者）で明らかに高かった。

更に「活動」において、「普遍的自立」と「環境限定型自立」を分けてみることにより、一見「自立」しているようにみえても「普遍的自立」に達しえず「環境限定型自立」にとどまる者がこの群において「身体障害者手帳非所持」群より多いことも確認された。このような状態は一応「自立」ではあるものの、既に限定された自立状態であり、訪問リハビリテーションを必要とするような「非自立」に転落する危険の大きいものであり、いわば訪問リハビリテーション必要者の「予備軍」である。

これは予防的な意味を含めての訪問リハビリテーションを既に必要としているか、今後必要とする可能性の大きい「ハイリスク」群に属するかするものが、この群に多いことを意味している。

この群は要介護認定を受けてはいない（すなわち明らかに介護を必要とする状態ではない）が、身体障害者手帳の給付を受けるだけの「心身機能」の低下を持っているものであり、それがこのようなかたちで「活動」「参加」等に悪影響を及ぼしていると考えられる。

しかしながら一方では「活動」の「質」と「量」との低下が「生活の不活発化」をまねき、「廃用症候群」を発生させ、それが「活動」「参加」を更に低下させるという「悪循環」に既に陥っている可能性もある。特にわずか1年の間に1割以上の人々が「家の中のことを行わなくなった」というように生活機能の低下が進行しているとの所見はこれを強く疑わせるものである。

E. 結論

1 地方都市の、要介護認定を受けていないが身体障害者手帳を持っている在宅高齢者の、ICFにもとづく生活機能の調査により、かなり多くのものが「活動」「参加」「心身機能」に問題を有しており、予防的な意味を含めての訪問リハビリテーションを既に必要としているか、今後必要とする可能性が高いと考えられることが確認された。すなわち要介護認定を受けていない高齢者の中で、身体障害者手帳を有する群を「生活機能低下に関するハイリスク群」としてとらえることが重要と思われる。今後の訪問リハビリテーション・システムの構築の上でこのような特長に十分な注意を払うことが必要と考えられる。

F. 健康危険情報

特になし

在宅要介護認定者の生活機能

—訪問リハビリテーション・システム構築のために—

分担研究者 中村 茂美 アール医療福祉専門学校 学科長代理

主任研究者 大川 弥生 国立長寿医療センター 研究所 部長

研究要旨 現在の訪問リハビリテーションの対象となることの多い在宅要介護認定者の生活機能の状況を、中山間部地域の1市における全数調査として、ICF（WHO国際生活機能分類）にもとづいて調査した。

対象は65才以上の在宅生活の要介護認定者全員のうち入院・入所者を除いた429名（平均年齢82.3±8.4才、要支援163名、要介護1 160名、要介護2 35名、要介護3 32名、要介護4 21名、要介護5 18名）であった。

その結果、在宅要介護認定者において、要介護度とおおむね並行して「活動」（「質」と「量」の両面で）「参加」「心身機能」の著しい低下がみられること、約4割が身体障害者手帳を所持することなどが確認され、今後の訪問リハビリテーション・システムの構築のための貴重な情報が得られた。

A. 研究目的

現在の我が国の訪問リハビリテーションには多くの問題がある。基本的な問題点は、入院・入所リハビリテーションなどとも共通することとして、「心身機能」への対応を主とする機能訓練中心であることであるが、それだけでなく訪問リハビリテーションは「機能維持」を目的とする「維持期のリハビリテーション」という位置づけで、しかも外来あるいは通所リハビリテーションが不可能な場合に「やむを得ず」行なうものとされがちなのが大きな問題である。

これに対し、我々は以前から訪問リハビリ

テーションとは自宅という現実の生活の場で直接「活動」（生活行為）に働きかけて、その向上をはかること、すなわち「生活の場における活動向上訓練」に他ならないと考えてきた。その点で、訪問リハビリテーションは、訪問でなければ実現できないような独自の大きなメリットをもつものであり、プログラムやシステムの設定において、そのようなメリットを十分に生かせるような取り組みが重要である。

今回そのための基礎調査として、訪問リハビリテーションの対象となることの多い在宅要介護認定者の生活機能の実態をICF

(WHO 国際生活機能分類) にもとづいて調査した。

B. 研究方法

1. 調査方法及び対象

1 市の在宅要介護認定者を対象として、要介護度が要支援～要介護 5 の全員から入院・施設入所者・住所不明者等を除いた 468 名を対象として、担当介護支援専門員が訪問して調査し、回答は 463 名 (回収率 98.9%) から得た。そのうち 65 歳以下を除外した 429 名 (平均年齢 82.3 ± 8.4 才、要支援 163 名、要介護 1 160 名、要介護 2 35 名、要介護 3 32 名、要介護 4 21 名、要介護 5 18 名) を分析対象とした。このうち前期高齢者 (65-74 歳) は 66 名 (男性 35 名、女性 31 名)、後期高齢者 (75 歳～) は 363 名 (男性 91 名、女性 272 名) であった。

調査項目は、WHO・ICF モデルに基づき生活機能の 3 つのレベルのうち、「活動」「参加」に重点をおき、また健康状態、環境因子についても調査した。

「活動」については、自立度(「活動」の「質」と生活の活発さ(「活動」の「量」)の両面から調査した。これはこれらの「質」と「量」とを「掛け合わせ」たものが全体としての「生活の活発性」であり、それが低下することが「廃用症候群」を引き起こし、生活機能全般の低下に及ぶことがしばしばみられるからである。

(倫理面の配慮)

主任研究者の所属機関の倫理委員会にて審査を受け、研究の承認を受けた。また当該自治体の個人情報保護・管理等の規則に従い、

本研究について自治体と主任研究者との間で協定書を締結している。

なお対象となる被検者についてはインフォームド・コンセントの原則に立って実施している。

C. 結果と考察

以下、「活動」、「参加」、「健康状態」、「環境因子」、そして介護予防上重視されている廃用症候群との関連の深い「活動」の「量」的側面をみる「生活の活発さ」について、要介護度別に分析した。

I. 活動の状況 (1) 自立度－「活動」の「質」

1. 歩行・移動

1) 屋外歩行

屋外歩行の状況を要介護度別にみたものを表 1 に示す。

訪問リハビリテーションとしての実生活の場の実用歩行訓練の対象となるのは、介護歩行を歩行自立にまで向上させることと、「環境限定型自立」の「普遍的自立」への向上である。

このような観点でみると、屋外歩行における「普遍的自立」である「遠くへも一人で歩いている」は要支援では 163 名中 7.4%、要介護 1 では 160 名中 2.5%、要介護 2・3 はそれぞれ 1 名であり、要介護 4・5 は 0 名であった。

「環境限定型自立」である「近くあれば一人で歩いている」は要支援では 65.0%、要介護 1 : 40.6%、2 : 20.0%、3 : 9.4%、4～5 は 0% であった。

両者を合計した「自立者計」は、要支援では 72.4%、要介護 1 : 43.1%、2 : 22.9%、

3 : 12.5%、4～5 : 0%であった。

このように屋外歩行の自立度は「普遍的自立」の状態にある者は少なく、要介護度との関連にも、ややバラツキがあったが、「自立計」としてみると要介護度との関連はきわめて明らかであった。

次に非自立者についてみると、「誰かと一緒にであれば歩いている」は要支援では 8.0%、要介護 1 : 19.4%、2 : 31.4%、3 : 15.6%、4 : 19.0%、5 : 5.6%と要介護 2 までは要介護度と並行し増加し、その後は減少した。「外は歩いていない」は要支援では 19.6%、要介護 1 : 37.5%、2 : 45.7%、3 : 71.9%、4 : 81.0%、5 : 94.4%と明らかに並行していた。

両者を合計した「非自立者計」は要支援では 27.6%、要介護 1 : 56.9%、2 : 77.1%、3 : 87.5%、4・5 : 100%と、要介護度が進むほど増加していった。

2) 自宅内歩行

自宅内歩行についても、介護歩行から歩行自立への向上と「普遍的自立」への向上が訪

問リハビリテーションの重要なターゲットである。自宅内歩行の状況は表 2 に示すように、「普遍的自立」に準ずる「何もつかまらずに歩いている」は要支援では 22.7%、要介護 1 21.3%、要介護 2 28.6%、要介護 3 6.3%、要介護 4 4.8%、要介護 5 0%であった。すなわち要介護 2 と要介護 3 との間の落差が目立つ。

「環境限定型自立」に準ずる「よく家具や壁を伝わっている」は要支援では 68.1%、要介護 1 : 68.1%、2 : 45.7%、3 : 40.6%、4～5 : 0%であり、要支援と要介護 1 では全体の 3 分の 2 以上が「伝い歩き」をしている。要介護 2・3 でも 4～5 割がそうであり、その後急激に 0 となる。

両者を合計した「自立者計」は要支援では 90.8%、要介護 1 : 89.4%、2 : 74.3%、3 : 46.9%、4 : 4.8%、5 : 0%であり、要介護度との関連性が明らかであった。また要介護 3 までは約半数以上が自宅内歩行自立であったことが注目される。

表 1 屋外歩行—要介護度別—

	要支援	要介護 1	要介護 2	要介護 3	要介護 4	要介護 5
遠くへも一人で歩いている	12名 7.4%	4名 2.5%	1名 2.9%	1名 3.1%	0名 0.0%	0名 0.0%
近くであれば一人で歩いている	106 65.0%	65 40.6%	7 20.0%	3 9.4%	0 0.0%	0 0.0%
誰かと一緒にであれば歩いている	13 8.0%	31 19.4%	11 31.4%	5 15.6%	4 19.0%	1 5.6%
外は歩いていない	32 19.6%	60 37.5%	16 45.7%	23 71.9%	17 81.0%	17 94.4%
計	163 100%	160 100%	35 100%	32 100%	21 100%	18 100%

次に非自立者である「誰かと一緒に歩いている」は要支援では3.7%、要介護1:3.8%、2:2.9%、3:15.6%、4:19.0%、5:0%で、要介護4までは増えていくが、要介護5では急に0となる。「ほとんど四つ這いなど」は要支援では5.5%、要介護1:4.4%、2:11.4%、3:12.5%、4:23.8%、5:5.6%、「ほとんどベッドや布団の上の生活」は要介護度との関連性が著明で、要支援では0%、要介護1:2.5%、2:11.4%、3:25.0%、4:52.4%、5:94.4%であった。

「非自立者計」は要支援では9.2%、要介護1:10.6%、2:75.7%、3:53.1%、4:95.2%、5:100%であった。

訪問リハビリテーションのプログラムとの関連では、四つ這い移動可能な者を、つたい歩きや介護歩行などで歩行を可能とすることにはかなりの可能性があるものと考えられ、それにより家庭内及びびで社会的な役割を拡大することができると思われる。

3) 畳や床からの立ち上がり

和式生活での必要性の高い畳や床からの立

ち上がりの状況は表3に示すように、「普遍的自立」に準ずる「不自由なし」は要支援では6.7%、要介護1 3.8%、要介護2 14.3%、要介護3 3.1%、要介護4・5は0%であった。

「環境限定型自立」に準ずる「床や家具に手をつけてしている」は要支援では83.4%、要介護1:75.6%、2:45.7%、3:43.8%、4:9.5%、5:5.6%であった。

両者を合計した「自立者計」は要支援では90.2%、要介護1:79.4%、2:60.0%、3:46.9%、4:9.5%、5:5.6%であり、要介護度との関連が明らかであった。

次に非自立者である「助けてもらっている」は要支援では2.5%、要介護1:7.5%、2:20.0%、3:34.4%、4:38.1%、5:22.2%、「行っていない」は要支援では7.4%、要介護1:13.1%、2:20.0%、3:18.8%、4:52.4%、5:72.2%であった。

「非自立者計」は要支援では9.8%、要介護1:20.6%、2:40.0%、3:53.1%、4:90.5%、5:94.4%であり、要介護度の進行と並行して増加していた。

表2 自宅内歩行—要介護度別—

	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5
何もつかまらずに歩いている	37名 22.7%	34名 21.3%	10名 28.6%	2名 6.3%	1名 4.8%	0名 0.0%
よく家具や壁を伝わっている	111 68.1%	109 68.1%	16 45.7%	13 40.6%	0 0.0%	0 0.0%
誰かと一緒に歩いている	6 3.7%	6 3.8%	1 2.9%	5 15.6%	4 19.0%	0 0.0%
ほとんど四つ這いなど	9 5.5%	7 4.4%	4 11.4%	4 12.5%	5 23.8%	1 5.6%
ほとんどベッドや布団の上の生活	0 0.0%	4 2.5%	4 11.4%	8 25.0%	11 52.4%	17 94.4%
計	163 100%	160 100%	35 100%	32 100%	21 100%	18 100%

表3 畳や床からの立ち上がり—要介護度別—

	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5
不自由なし	11名 6.7%	6名 3.8%	5名 14.3%	1名 3.1%	0名 0.0%	0名 0.0%
床や家具に手をつけている	136 83.4%	121 75.6%	16 45.7%	14 43.8%	2 9.5%	1 5.6%
助けてもらっている	4 2.5%	12 7.5%	7 20.0%	11 34.4%	8 38.1%	4 22.2%
行っていない	12 7.4%	21 13.1%	7 20.0%	6 18.8%	11 52.4%	13 72.2%
計	163 100%	160 100%	35 100%	32 100%	21 100%	18 100%

また「床や家具に手をつけて」立ち上がっている者が、要支援と要介護1で8割前後、要介護2と3で4～5割と多かったが、このように我々が以前から主張していた、手をついたりものにつかまったりすることの実用性の高さはこのデータからもみてとることができる。訪問リハビリテーションの課題の一つは「助けてもらっている」状態を「床や家具に手をつけている」の状態にまで高めることであり、訪問リハビリテーションのプログラムにおいて、自宅での実際の生活にそくして家具の再配置や適切な立ち上がり方の指導を行うことが重要と考えられる。

2. 日常生活行為

いわゆるADL（日常生活行為）のうち、前節で検討した起居・移動を除く身の回りの生活行為（セルフケア）についてここで述べる。

1) 身の回りのことで少しでも不自由な行為

身の回りのことで少しでも不自由な行為は

表4に示すように、「あり」は要支援では69.3%、要介護1 81.9%、要介護2 91.4%、要介護3 90.6%、要介護4 85.7%、要介護5 55.6%であった。

2) 身の回りのことで人に助けてもらっている行為

身の回りのことで人に助けてもらっている行為は表5に示すように、「あり」は要支援では28.2%、要介護1 43.1%、要介護2 51.4%、要介護3 68.8%、要介護4 81.0%、要介護5 72.2%であった。「なし」は要支援では71.8%、要介護1 :56.9%、2 :48.6%、3 :31.3%、4 :19.0%、5 :27.8%であった。例数が少ないためと思われる変動が要介護4と同5の間に見られるが、それ以外は要介護度と「人に助けてもらっている行為」の有無とはよく並行していた。

介護を要している項目についての活動向上訓練が必要であると考えられる。

表4 身の回りのことで少しでも不自由な行為—要介護度別—

	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5
あり	113名 69.3%	131名 81.9%	32名 91.4%	29名 90.6%	18名 85.7%	10名 55.6%
なし	50 30.7%	29 18.1%	3 8.6%	3 9.4%	3 14.3%	8 44.4%
計	163 100%	160 100%	35 100%	32 100%	21 100%	18 100%

表5 身の回りのことで人に助けられている行為—要介護度別—

	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5
あり	46名 28.2%	69名 43.1%	18名 51.4%	22名 68.8%	17名 81.0%	13名 72.2%
なし	117 71.8%	91 56.9%	17 48.6%	10 31.3%	4 19.0%	5 27.8%
計	163 100%	160 100%	35 100%	32 100%	21 100%	18 100%

3) 靴下を履く

身の回りの行為の中でも立って靴下を履くことは特に難しい場合が多いので分けて調査した。

靴下を履く状況は表6に示すように、普遍的自立である「もたれずにしている」は要支援では1.8%、要介護1 0.6%、要介護2 2.9%、要介護3～5は0%、環境限定型自立である「もたれてしている」は要支援では8.6%、要介護1 : 4.4%、2 : 2.9%、要介護3～5 : 0%であった。

「座ってしている」は要支援では88.3%、要介護1 : 84.4%、2 : 74.3%、3 : 46.9%、

4 : 14.3%、5 : 11.1%であり、これが要介護2までで非常に多いことが目立った。

これら3者を合わせた「自立者計」は要支援では98.8%、要介護1 : 89.4%、2 : 80.0%、3 : 46.9%、4 : 14.3%、5 : 11.1%と、要介護度の悪化に伴って低下していた。

次に非自立者である「はかせてもらっている」は要支援では1.2%、要介護1 : 10.6%、2 : 17.1%、3 : 53.1%、4 : 85.7%、5 : 83.3%であり、ほぼ要介護度と並行して増加していた。ただ要介護4・5でも自分でしている人が14%以上いたことは注目に価する。

表6 靴下を履く状況－要介護度別－

	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5
もたれずにしている	3名 1.8%	1名 0.6%	1名 2.9%	0名 0.0%	0名 0.0%	0名 0.0%
もたれてしている	14 8.6%	7 4.4%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
座ってしている	144 88.3%	135 84.4%	26 74.3%	15 46.9%	3 14.3%	2 11.1%
はかせてもらっている	2 1.2%	17 10.6%	6 17.1%	17 53.1%	18 85.7%	15 83.3%
返答なし	0 0.0%	0 0.0%	1 2.9%	0 0.0%	0 0.0%	1 5.6%
計	163 100%	160 100%	35 100%	32 100%	21 100%	18 100%

Ⅱ. 「活動」の状況(2): 生活の活発さ－「活動」の「量」

活発な生活を送ることは廃用症候群を予防し、生活機能の低下を予防する上で重要である。そのため種々の角度から「生活の活発さ」を調べた。

1. 一日の活動状況

一日の活動状況は表7に示すように、「よく動いている」は要支援では23.9%、要介護1 12.5%、要介護2 17.1%、要介護3 3.1%、要介護4・5は0%であり、要介護度の進行とともに急速に低下した。

「座って過ごすことが多い」は要支援では63.2%、要介護1 : 52.5%、2 : 51.4%、3 : 59.4%、4 : 52.4%、5 : 11.1%であり、要介護5を除く全要介護度で半数以上がこのレベルにあった。「日中も横になっていることが多い」は要支援では11.7%、要介護1 : 28.8%、2 : 28.6%、3 : 21.9%、4 : 28.6%、5 :

27.8%であり、「ほとんど横になっている」は要支援では1.2%、要介護1 : 6.3%、2 : 2.9%、3 : 15.6%、4 : 19.0%、5 : 61.1%と要介護5で特に多かった。

2. 外出頻度

外出頻度は表8に示すように、「週4回以上」は要支援では20.2%、要介護1 15.6%、要介護2 25.7%、要介護3 9.4%、要介護4 14.3%、要介護5 0%であった。「週2～3回」は要支援では44.8%、要介護1 : 45.0%、2 : 37.1%、3 : 43.8%、4 : 9.5%、5 : 33.3%であった。

この2者を合計した「週2～3回以上」は要支援 65.0%、要介護1 60.6%、要介護2 62.9%、要介護3 53.1%、要介護4 23.8%、要介護5 33.3%とかなりよく要介護度と並行していた。

「週1回」は要支援では19.6%、要介護1：10.6%、2：11.4%、3：15.6%、4：19.0%、5：22.2%であった。これを加えた「週1回以上」は要支援では84.6%、要介護1 71.2%、要介護2 74.2%、要介護3 68.8%、要介護4 42.8%、要介護5 55.5%であり、要介護4、5という状態でも4～5

割が週1回は外出していることは注目される。次いで「月1～3回」は要支援では8.0%、要介護1：13.1%、2：17.1%、3：12.5%、4：14.3%、5：5.6%、「ほとんどなし」は要支援では7.4%、要介護1：15.6%、2：8.6%、3：18.8%、4：42.9%、5：38.9%であった。

表7 一日の活動状況—要介護度別—

	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5
よく動いている	39名 23.9%	20名 12.5%	6名 17.1%	1名 3.1%	0名 0.0%	0名 0.0%
座ってすごすことが多い	103 63.2%	84 52.5%	18 51.4%	19 59.4%	11 52.4%	2 11.1%
日中も横になっていることが多い	19 11.7%	46 28.8%	10 28.6%	7 21.9%	6 28.6%	5 27.8%
ほとんど横になっている	2 1.2%	10 6.3%	1 2.9%	5 15.6%	4 19.0%	11 61.1%
計	163 100%	160 100%	35 100%	32 100%	21 100%	18 100%

表8 外出頻度—要介護度別—

	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5
週4回以上	33名 20.2%	25名 15.6%	9名 25.7%	3名 9.4%	3名 14.3%	0名 0.0%
週2～3回	73 44.8%	72 45.0%	13 37.1%	14 43.8%	2 9.5%	6 33.3%
週1回	32 19.6%	17 10.6%	4 11.4%	5 15.6%	4 19.0%	4 22.2%
月1～3回	13 8.0%	21 13.1%	6 17.1%	4 12.5%	3 14.3%	1 5.6%
ほとんどなし	12 7.4%	25 15.6%	3 8.6%	6 18.8%	9 42.9%	7 38.9%
計	134 100%	160 100%	35 100%	32 100%	21 100%	18 100%